**読み物を読む前に**

①　学校ではよく童話や小説が教材として使用されるが、その理由を考えてみよう。

②　このの著者・についてインターネットなどで調べてみよう。特に、彼の（一二歳ごろまで）の、教育経験、宗教的を中心に調べよう。

③　この童話の題は『の』だが、「一房の葡萄」と聞いて、どのようなイメージがくだろうか。

④　この作品が書かれたのは一九二〇年代である。当時の日本社会について本やインターネットなどで調べてみよう。

**読み物**

『の』（岩波書店、一九八八年（一九二二年））

　僕は小さい時に絵をくことが好きでした。僕のっていた学校はのという所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校のきかえりには、いつでもホテルや西洋人の会社などが、ならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海沿いに立って見ると、な海の上にだの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、から檣へ万国旗をかけわたしたのやがあって、がいたいようにでした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、に帰ると、えているだけを出来るだけ美しく絵に描いて見ようとしました。けれどもあのきとおるような海のと、白いなどの近くに塗ってあるとは、僕の持っている絵の具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本当の景色で見るようには描けませんでした。

　ふと僕は学校の友達の持っている西洋絵具を思い出しました。その友達はやはり西洋人で、しかも僕より二つが上でしたから、は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具はの上等のもので、軽い木の箱の中に、十二の絵具が、小さなのように四角な形にかためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とはするほど美しいものでした。ジムは僕よりが高いくせに、絵はずっとでした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえなんだか見ちがえるように美しくなるのです。僕はいつでもそれをしいと思っていました。あんな絵具さえあれば、僕だって海の景色を、本当に海に見えるように描いて見せるのになあと、自分の悪い絵具をみながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなりましたけれども僕はなんだかになって、パパにもママにも買って下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつづけるばかりでか日がたちました。

　今ではいつのだったか覚えてはいませんが、秋だったのでしょう。の実がしていたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように、空の奥の奥まで見すかされそうに晴れわたった日でした。僕たちは先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当のでも、僕の心はなんだかかないで、その日の空とはうらはらにかったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。かが気がついて見たら、顔もきっと青かったかも知れません。僕はジムの絵具がほしくってほしくってたまらなくなってしまったのです。胸が痛むほどほしくなってしまったのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑ったりして、わきにっている生徒と話をしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っていて笑っているようにも思えるし、か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから」といっているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれども、ジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

　僕はかわいい顔はしていたかも知れないが、体も心も弱い子でした。その上で、言いたいことも言わずにすますようなでした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もないでした。がすむと他の子供たちはにに出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけにはいっていました。そとが明るいだけに教場の中は暗くなって、僕の心の中のようでした。自分の席に坐っていながら、僕の眼は時々ジムのの方に走りました。ナイフで色々ないたずら書きがりつけてあって、でになっているあのをげると、その中に本や雑記帳やと一緒になって、のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽを向いてしまうのです。けれどもすぐまた横眼でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところがどきどきとして苦しいほどでした。じっと坐っていながら、夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

　教場に、はいるがかんかんと鳴りました。僕は思わずぎょっとしてりました。生徒たちが大きな声で笑ったりったりしながら、洗面所の方に手を洗いに出かけてくのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓のところに行って、半分夢のようにそこの蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり、雑記帳や鉛筆箱とまじって、えのある絵具箱がしまってありました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちをむやみにしてから、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅とのをげるが早いか、ポケットの中にみました。そして急いでいつも整列して先生を待っている所に走って行きました。

　僕たちは若い女の先生に連れられて教場にりの席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかったけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことをも気のついた様子がないので、気味が悪いような安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生のることなんかは耳にはいりははいっても、なんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

　僕はしかし先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな耳こすりでもしているようだと思いながら一時間がたちました。

　教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心してをつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕ので一番大きな、そしてよくできる生徒に

　「ちょっとこっちにおで」と肱の所をまれていました。僕の胸は、宿題をなまけたのに先生に名をされた時のように、思わずどきんと震えはじめました。けれども僕はできるだけ知らない振りをしていなければならないと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場のに連れてかれました。

　「君はジムの絵具を持っているだろう。ここに出しえ」

　そういってその生徒は僕の前に大きくげたて手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落ち着いて、

　「そんなもの、僕持ってやしない」と、ついでたらめをいってしまいました。そうすると三、四人の友達と一緒に僕のに来ていたジムが、

　「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つもくなってはいなかったんだよ。そして昼休みがんだら二つ失くなっていたんだよ。そして休み時間に教場にいたのは君だけじゃないか」と少し言葉を震わしながら言いかえしました。

　僕はもうだと思うと急に頭の中に血が流れこんで来て顔がになったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポッケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、にでとてもいません。僕のポッケットの中からは、見る見るマーブル（今のビーのことです）やのメンコなどと一緒に、二つの絵具のかたまりがみ出されてしまいました。「それ見ろ」といわんばかりの顔をして、子供たちはらしそうに僕の顔をみつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前がになるようでした。いいお天気なのに、みんな時間を面白そうに遊び廻っているのに、僕だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなぜしてしまったんだろう。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目だ。そんなに思うと弱虫だった僕はしく悲しくなって来て、しくしくと泣き出してしまいました。

　「泣いておどかしたって駄目だよ」とよく出来る大きな子がにするような、みきったような声で言って、動くまいとする僕をみんなで寄ってたかって二階にって行こうとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれども、こうとう力まかせに引きずられて、を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生のがあるのです。

　やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとははいってもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「おはいり」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋にはいる時ほどいやだと思ったことはまたとありません。

　何か書物をしていた先生は、どやどやとはいって来た僕たちを見ると、少し驚いたようでした。が、女のくせに男のようにの所でぶつりと切った髪の毛を右の手でであげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、ちょっと首をかしげただけでのというをなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前に出て、僕がジムの絵具を取ったことをしく先生に言いつけました。先生は少し曇った顔付きをして真面目にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか」と聞かれました。本当なんだけれども、僕がそんないやなだということを、どうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかったのです。だから僕は答える代わりに本当に泣き出してしまいました。

　先生はく僕を見つめていましたが、やがて生徒たちに向かって静かに「もういってもようございます」といって、みんなをかえしてしまわれました。生徒たちは少し物足らなそうにどやどやと下に降りていってしまいました。

　先生は少しのなんとも言わずに、僕の方も向かずに、自分の手のを見つめていましたが、やがて静かに立って来て、僕の肩の所を抱きすくめるようにして「絵具はもう返しましたか」と小さな声でいました。僕は返したことをしっかり先生に知ってもらいたいのでといて見せました。

　「あなたは自分のしたことをいやなことだったと思っていますか」

　もう一度そう先生が静かに仰った時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがないを、みしめても噛みしめてもが出て、眼からは涙がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心持ちになってしまいました。

　「あなたはもう泣くんじゃない。よくったらそれでいいから泣くのをやめましょう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私のこのお部屋にいらっしゃい。静かにしてここにいらっしゃい。私が教場から帰るまでここにいらっしゃいよ。いい」と仰りながら僕をに坐らせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高くいったから、の西洋葡萄をもぎとって、しくしくと泣きつづけていた僕のの上にそれをおいて、静かに部屋を出てきなさいました。

　ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさましました。僕は先生の部屋でいつのにか寝入りをしていたと見えます。少しせての高い先生は、を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠ったために気分がよくなって今まであったことは忘れてしまって、少ししそうに笑いかえしながら、てて膝のうえからり落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して、笑いも何もんでしまいました。

　「そんなに悲しい顔をしないでもよろしい。もうみんなは帰ってしまいましたから、あなたもお帰りなさい。そしてはどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。きっとですよ」

　そういって先生は僕のカバンの中にそっと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海をめたり船を眺めたりしながら、つまらなくに帰りました。そして葡萄をおいしくべてしまいました。

　けれども次のが来ると僕はなかなか学校に行く気になれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限って虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながらは出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門をはいることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんといっても見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかったら先生はきっと悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただそのがあるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

　そうしたらどうでしょう、ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そしてのことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいて、どきまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て「見ろ泥棒のつきの日本人が来た」とでもをいうだろうと思っていたのに、こんなにされると気味が悪いほどでした。

　二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に戸を開けて下さいました。二人は部屋の中にはいりました。

　「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってもらわなくってもいいと言っています。二人は今からいいお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をしなさい。」と先生はにこにこしながら僕たちを向い合わせました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはぶら下げている僕の手をいそいそとり出して堅く握ってくれました。僕はもうなんといってこのしさをせばいいのか分からないで、恥しく笑うありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながら僕に、

　「の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔をにして「ええ」と白状するより仕方がありませんでした。

　「それならまたあげましょうね。」

　そういって、先生はなリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白い左の手の上にのふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色のでからぷつりと二つに切って、ジムと私に下さいました。真白い手のに紫色の葡萄の粒がって乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

　僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

　それにしても僕の大好きなあの先生はどこにかれたでしょう。もう二度とはえないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

**読み物を読んだ後で**

①　この童話の中の会話は、何語で行われていると思うか、また、なぜそう思うのか 。

②　登場人物の「僕」、「ジム」、「僕ので一番大きな、そしてよくできる生徒」、「先生」は、それぞれ何人だと思うか、その理由は何か答えなさい。

③　「僕」がしたことに対する「先生」の対応について、どう思うか、また、あなたが「先生」だったら、同じことをしていると思うか考えてみよう。

④　この童話の題「一房の葡萄」とは何を意味しているのか、自分の考えを述べなさい。

⑤　この童話の主題は何だろうか。この童話を読んだ感想・意見を四百字程度にまとめなさい。